



TITLE:

# 討論会「学知と地域・国家・社会 を考える」:全体討論

AUTHOR(S):

---

CITATION:

討論会「学知と地域・国家・社会を考える」:全体討論. 2015年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ 東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ報告論文集 2016: 112-119

ISSUE DATE:

2016-06-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/215798>

RIGHT:

## 全体討論

編集・翻訳：中山大将、福谷彬、巫靚

### 質問と感想

坂梨健太：

第一に、「国家」、「民族」、「地域」「人間」はどれも極端な焦点化をすると危険ではないかと思います。

第二に、中山氏が言う「市民」が日本でもかなりマイノリティである気がします。「市民」になる余裕が日本社会にはなくなりつつあるように思います。

野口優：

ごく簡単な感想です。「市民社会との関わり」についてです。三者とも共通であったのが、「研究者」のみの見解で論じられておりました。ただし、我々が将来的になるであろう、大学の教員もしくは研究機関の研究者とも「教育者」としての一面も強く有しております。三者とも現在の肩書は「博士課程院生」もしくは「ポスドク研究員」です。三者が「教育」を担当するようになった際に、この議題に対する見解に如何なる変化が生じるのか、興味深く感じます。

テン ヴェニアミン：

中山氏が国家の間に「歴史認識の徹底的な共有が必要だとは考えておりません」という意見に全く賛成です。国によって歴史認識が絶対に一致しないと私も思います。ただ、問題は「違うなら、交流する必要もないじゃないか」という考えを持つ人々が増える可能性があることです。重要なのは、なぜ他国と歴史認識が違うのかということのをさらに深く考える段階へとシフトすることではないでしょうか。

楊維公：

人文社会科学分野の縮小に関する先ほど四方のご意見にとっても賛同しております。ただひとつ私自身が聞かれたことのある疑問をおうかがいしたいです。国立大学を対象とした文系縮小は学生数の減少につながります。国立大の学生が減れば、私立大学の学生数が増えることになります。定員割れが続き経営難に陥っている私立大学にとって一見するとメリットにも見えりかもしれません。逆に考えると、私立大学が倒産したら、研究職のポストが減り、国立大学の研究者が就職できなくなる可能性もあります。この問題はどう解決すればいいのでしょうか。

矢内真理子：

「学問に対する自由」「研究に対する自由」については、国家を超えるものだと思います。我々研究者は膨大な時間や先人の蓄積の上に成り立っているので、今の社会が考えているようには、成果がすぐに出たり、価値が金銭でなんとかできるものではないということのを再認識する必要があるかと思います。

日本のマスコミは、国の立場に立って報道してます（私の過去の研究で「尖閣国有化の日本の新聞報道」がある）。私はマスメディアに利用されないようにという福谷さんの主張に同意します。

**江俊億：**

福谷さんは「研究の自由」と「言論の自由」が同じものではないとおっしゃりましたが、これは非常に的確に現実を把握した観察であると思います。最も現実社会に距離の近いメディアはいかに研究者自身の「現実離れした」態度と結びつくか、またどのようにすればさらに一步理想に近づけるのかということについて福谷さんや他の討論者の方はどう考えていらっしゃるでしょうか。ぜひともみなさんのご意見をうかがいたく思います。

**瀬戸徐映里奈：**

応答可能性責任を負いながらも、“人間”を見ていくことについては、概ね賛同します。研究者が自由な研究をできることの重要さはもちろんですが、今日のテーマでは研究の対象者、その研究で描かれる人への研究者としての責任についてどう思われているのが気になりました。岩下教授のように固定化したものではない別の視点を提示することは学的な貢献かと思います。

しかし、中山さんが例に出された朴裕河氏の起訴についてですが、被害にあったハルモニ（韓国語で「おばあさん」の意）たちからの告発であったことが抜け落ちてしまいます。小倉紀蔵教授の“正しい歴史像”（による別の歴史像）の排除という指摘は、結局、国家のなかに被害者である“人間”を押し込め矮小化してしまったのではないのでしょうか。この点について、研究はまず対象に対してどうあるべきか、ご回答をいただければと思います。

**林子博：**

王楠さんの応答の中では、中国政府が「過度の歴史」を政治の表舞台に持ち出しているとのこと指摘が面白いと思いました。ただ、素朴な疑問として、どれくらいの量またはいかなる程度の歴史が「過不足なく」と言い得るのでしょうか。つまり、「過度」であるかどうかを判断する基準についてどう考えていらっしゃるのか。陳さんの発言でも言及された、中国の抗日ドラマの激増など、現在中国の社会現象や政治の動きとからみつつ、お考えを述べていただければ幸いです。

## 応答

### 陳威璿：

8人の方からのご質問をまとめて回答をしたいと思います。まず坂梨さんの質問です。一つ目は、国家、民族、地域、人間いずれの視角も狭い視野ではないかという質問でした。これはすべての視角はいずれも完全ではないということかと思います。異なる視角には異なる限界があります。どの視角も狭い側面があり、それでは見えないものが存在します。しかし、我々は神ではなく、我々はただ狭い視角に依らざるを得ません。一つの視点にいかなる限界があり、それによって異なる視角から物事を観察するということを認識できればと私は思います。楽観的な回答かもしれませんが、これがいまのところ私の思いつく考えです。

第二の質問は市民が日本では比較的少数ではないかということでしたが、台湾でも同様だと思います。台湾ではある教授たちが一般民衆に向けて簡素な活動を組織しています。これは人々に討論する習慣を植え付けるため、一般の民衆を公民に変わらせるためです。もちろん、このような努力に頼るだけでは不十分です。なぜならば、一般の民衆が市民に変わるには、時には特別な事件が必要となるからです。台湾は徴兵制国家ですが、ある時に入営中の者が死亡する事件が起きました。このため2013年には一人の兵士の死により、大規模な抗議運動が発生しました。近年の台湾において、これは一般の民衆が市民へと変わる一つの重要な事件となりました。このため、私は市民の数が増大する可能性があると思ひますし、我々は時にはこのような可能性を待ったり作り出したりするだけです。以上が私の簡潔な回答です。またご意見をいただければ幸いです。

次に野口さんの質問についてです。研究者は大学に入った後に、多くの非常に重大な仕事の負担に遭います。これが野口さんの質問と合っているかはわかりませんが、現在私が台湾の苦境と思っているのはこうした問題です。私は台湾の大学の現場において研究者は団結して起ち上がり、市民に向けた対話空間を開拓し、大学の中のどの仕事が必要で、どれが必要ではないのか、弁別すべきだと思います。その後に大学の構造全体を改変すべきです。こうして比較的大きな社会的影響力を発揮できます。以上が、簡潔な回答です。第三は、テン・ヴェニヤミンさんに対する回答です。私の回答はとても簡単で、私もテンさんの考えに賛成します。しかし、私は考えが一致していない点について強調する必要があります。これは重要な意味があると思います。もし一致するところばかり強調し過ぎれば、新たな覇権を作ってしまうかねないからです。ですので、私はやはり一致しない点から出発したいと思うのです。継続する交流には持続する対話が必要です。以上が私の簡潔な回答です。

第四は、楊維公さんに対する回答です。やはり状況は同様です。これは台湾においても重要な問題で、私立大学減少の問題です。国立大学の人文社会科学系の縮小と私立大学減少の原因は、主に学費と学生の就業機会を問題によるものです。国立大学と私立大学の人々は社会との対話を増強し、そうしてより大きな社会的影響力を獲得し、さらなる資金協力を得る機会が得られます。このように根本からこれらの問題を解決できるかもしれません。今のところは楽観的な考えかもしれませんが、みなさんのご意見を頂戴できればと思います。

矢内さんに回答しますと、特別な考えはなく、私も賛成ですと言いたく思います。

江俊億さんにお答えします。メディアと現実離れしている研究者がいかに結びつくかという問題ですが、我々はまずメディアも常に変化し続けているということを認識すべきだと思います。伝統的なメディアは一方向的で、一方は発信し、一方は受信するだけでした。Blogのような技術が出現して以来、こうした状況は変化しました。現在ではあらゆる人々がインターネットを利用でき、自らがメディアとなる時代です。研究者は現代社会で伝統的メディアと対立する状況に遭遇するかもしれません。しかし、新しい技術を使いさえすれば、我々自身がメディアとなります。私はこれがこの問題を解決する唯一の方法だと思いますし、研究者と社会との対話を増加させる方法だと思います。以上で、私の回答はすべてです。たくさんの時間を使ってしまったが、ご意見いただければ幸いです。

王楠：

時間が限られておりますので、陳さんの回答に私も比較的賛同しますから、重複は避けます。私はいくつかの問題についてだけ少しお答えしたいと思います。まず、坂梨さんの質問です。坂梨さんは、どの角度から観ても偏った観方になるのではないかとおっしゃいました。坂梨さんが言っているのは、どの角度から観ても、ある程度の偏りが出るということかと思います。しかし、歴史研究は完全には客観的とはなり得ず、もちろんだんな研究であれ、ある種の視点の影響を受けざるを得ず、それを自覚しているかもしれないし、自覚できていないかもしれません。

二つ目の質問ですが、楊菁華さんが文章の中ですでに提起したように、市民社会と普通の民衆とを区別すると、中国では市民と呼び得る人々は絶対的に少数である、あるいは市民と言うものの自体が中国には存在しないとも言えます。許燕華さんは中国人の青年は政治に対して比較的情熱があると聞いたそうですが、このような情熱は虚偽のものです。このような情熱は、毛沢東時代の遺産であり、実際には国家に順応しているだけです。もし彼らに政府に反対させるなら、彼らは何のはたらきもできないでしょう。

野口さんの質問について言いますと、私は現在学生ですが、皮肉なことに最近就職活動をし、私が見つけた仕事はマルクス主義学院にあるかもしれません。現在の中国大陆では多くの高等教育機関がマルクス主義学院を作り、多くのポストが生まれ、私が将来教えるであろう主な教科は政府が定めた近代史綱要かもしれず、それらは完全にマルクス主義的史学なのです。しかし、私は学生にどの部分は試験に合格するために必ず暗記しないといけない部分と教えると同時に、私自身の本当の研究を紹介するつもりです。時間がないので、これで私の回答としたいと思います。

(以下は、後日別途寄せられた回答)

「歴史の過度」という言葉は、ニーチェの「生にとつての歴史の利弊について」、つまりは『反時代的考察』の第二部<sup>訳注 1</sup>に由来するもので、そこでニーチェは「時宜に合わない」という観点を提起しました。当時のドイツで尊重されていた「歴史主義」を時代の欠陥とみなし、ドイツ人は一種の悪性の歴史病に罹患してしまったとニーチェは見なしたのです。ニーチェは当然ながら各人も各国家も過去に対する一定の理解をするべきだということを否定はしませんが、歴史は究極的には人間の下僕であり、歴史の意義は人類の現在と将来に奉仕することであって、「死者に生者を埋葬させる」ことではないと考えています。人間にとつての歴史への必要性に基づき、ニーチェは歴史を記念碑的歴史、好古的歴史、批判的歴史の三つに分類しています<sup>訳注 2</sup>。記念碑的歴史の「過度」は、歴史の中に無節操に模範を追い求めることに現れ、誤った歴史のアナロジーを用いて人を誤った方向へ導きます<sup>訳注 3</sup>。回顧としての歴史の「過度」は過去に対する極端な崇敬として現れ、一切の古い事物の保存に傾注し、新たな生命の創造に反対します<sup>訳注 4</sup>。批判としての歴史は破壊的であり、それが度を超すと、人々に何も崇高なものはないと思わせ、それゆえに生の嫌悪へと向かわせます<sup>訳注 5</sup>。これらの「過度」のために、当時の人々はなお中世的状態にあり、歴史は一種の偽装の神学に変わってしまったとニーチェは思っていました<sup>訳注 6</sup>。

ニーチェの精彩を放つ皮肉は、私にとっては「誘惑力」を持ち、私は現在の中国もまた類似した歴史熱に罹患していると思えます。「過度」という言葉は、「度」という字を含んではおりますが、何を「過度」とするか、何を適切な基準とするかは、実際には決めることが困難であり、計測可能な問題ではありません。もしニーチェの分析を借用し簡潔に述べるならば、「過度」とは歴史が生との自然な関係を毀損され、非歴史的な立場や超歴史的な立場<sup>訳注 7</sup>を欠くことであり、具体的には現象に対する観察を通じて歴史が過度かどうかを私は判断しました。

今回の討論会の中心の一つは東アジア各国の関係ですが、中国における日中関係に対する認識を見ますと、「歴史」はまさに偽の神学のようにあり、何も語らずとも歴史を避け切ることはできず、つねに戦争が残した傷を背負い続ける状態が形成されました。昨年 5 月、

訳注 1 以下、ニーチェの歴史論に関する訳にあたっては、フリードリヒ・ニーチェ「生にとつての歴史の利弊について」(『反時代的考察 上巻』井上政次訳、岩波書店、1935 年)を参照し、参考となる該当箇所を訳注に引用した。なお、同訳書では原文の「過量的歴史」に相当するであろう訳語としては「歴史の過度」(227 頁)のほかに「歴史の過剰」(139 頁)などが見られる。

訳注 2 ニーチェ、前掲書、140 頁を参照。

訳注 3 「現在のものに對して、過去の記念碑的考察は、以前の時代の古典的なもの・稀有なるものの研究は如何にして役立つのであるか？彼はそれから見てとるのである一嘗て世にあつた所の偉大なるものが兎も角も嘗て可能であつた、で、その故にまた再び可能であるであろう、といふことを。」前掲書、143 頁。

訳注 4 「全くただ生を保存することを知つてゐるだけである、生むことを知らない、その故に何時も生成するものを低く評価する」前掲書、153 頁。

訳注 5 「その時人は冷酷にあらゆる敬虔をふみにじり去るのである。それは何時も危険な、といふのは生自身にとつて危険な手続きである、そして過去を裁判し破壊するといふ此の仕方にて生に仕へる所の人間らと時代らとは、それは何時も危険な又危険に曝された人間らであり時代らである。」前掲書、154 頁。

訳注 6 「吾々はなほ中世に生きてゐる、歴史は依然として覆面せる神學である、と同様に、それをもつて非學問的の俗人が學問的の階級を取扱ふ所の畏敬は僧侶階級から傳承した畏敬である。」前掲書、198 頁。

訳注 7 「即ち歴史的たることへの解毒劑は非歴史的並びに超歴史的と呼ばれる。(中略)「非歴史的」といふ言葉をもつて私は忘れることが出来る所の、そして自身を限られた地平線のうちに閉ぢ込める所の術と能力とを表はす、それから私は目を生成から轉ぜしめ、存在に永遠性と同意味性とも性格を與へるものへ、藝術と宗教とへ向ける力を「超歴史的」と呼ぶ。」前掲書、228 頁。

人民網（人民日報が管理運営するサイト）は習近平が近年日中関係に対する5度の態度表明を総括し、いずれも特に歴史問題を強調しているとわかります。歴史問題はもとより重要ですが、日中戦争だけを中心にして展開している所謂「歴史問題」が日中関係の議論の核心になる必要があるのでしょうか？人々は「忘れた」のかもしれませんが。1980年代と90年代の中国メディア上にあったのは両国民の歓声と笑顔であり、その時には誰も過去に拘泥しませんでした。現在においては、1980、90年代の「過去」はゴミ箱へと打ち捨てられてしまいました。これこそ歴史の濫用の典型例です。抗日ドラマの激増も同様に濫用であり、大陸にはすべての番組を審査できる国家広電総局があるのに、こんなにも多くの珍奇なストーリーのドラマが放映されてしまうのは、政府がこうした歴史に対する病理に執着しているからではないでしょうか？皮肉なのは、強国の心理を以て過去を記念し、抗日戦争に手本を探し出し、英雄をでっちあげようとして、むしろ多くの人々を混乱させていることです。英雄たちはこんなに立派なのに、抗日戦争はどうしてなかなか勝利にいたらなかったのか？しかし、そんなことは「関係ない」のであり、過度の記念的歴史はもともとと同じ結果を求めているだけで、過程はどうでもいいです。最終的には抗日戦争が勝利を勝ち取って、中国共産党と関係する抗日戦争の英雄を記念することにまるで微塵も疑問の余地がないかのようです。

昨年の8月、習近平は抗日戦争が「中華民族の偉大なる復興の希望を開き、古き中国の鳳凰涅槃浴火重生（鳳凰が自ら身を焦がして復活すること）のための新たな道を拓いた」と評価しました。このように、抗日戦争ひいては現在の国家の発展の意義は数千年越しの鳳凰の完全な復活にあると政府は見なしております。よく考えると、「中国の夢」が初めて掲げられた場所は国家博物館でした。我々は未来に対する想像力はあまりにも欠乏で、狭隘化し神話化された過去からしか見つからないのです。話題となっている反腐敗キャンペーンについても見てみると、中国共産党中央規律検査委員会は人文科学者に反腐敗キャンペーンを論じるように頼みましたが、二月河<sup>訳注8</sup>が最も興味深いことを言っています。彼は「現在の反腐敗の徹底度合いは、『二十四史』<sup>訳注9</sup>の中にも見当たらないほどだ」と言いましたが、我々はまだ王朝時代に生きているというのでしょうか。大陸の政府は「言必論史（話せば必ず歴史を論じる）」の傾向を促進しており、このような古臭さは私にニーチェの「過度」に関する巧みな皮肉を思い起こさせずにはられないのです。

**福谷彬：**

たくさんのご意見をいただきありがとうございます。時間の関係で直接ご質問のあった江さんへのご質問にだけお答えしたいと思います。

江さんのご質問は、最も現実的なメディアと現実には接していない研究者がどう結合するかという問題だと理解しております。まず、研究者が現実には接していないという前提なのですけれども、私は必ずしもそうではないと理解しております。社会に発信する能力がない、あるいはそうした意欲に欠けているということはあっても、研究というものは常に現実に関わっているものだと思います。ですので、現実的なメディアというものといかにかかわるかという問題かと思っています。陳さんもおっしゃいましたが、メディアそれ自体も変

訳注8 中国の作家、本名は凌解放。鄭州大学文学院院长なども務めている。

訳注9 中国の伝説時代から明代までの各時代に関する歴史書の総称。

わってきていると思います。それは、メディアというものが発信するだけのものだったのが、視聴者の側の意向も吸収するメディアになったということと、Blog などを使っていろいろな人々が発信者になっているということだと思います。ですので、研究者は既存のメディアに利用されることなく自分自身が発信する主体となって、自身の研究を伝えていく姿勢が重要だと私は考えています。とても簡単ですが、これが今の私の考えです。

#### 中山大将：

（以下は、当日は時間の制限で回答できなかったため、後日に執筆した回答）

「当事者」、つまりは研究の対象や研究の過程で出会った個々人、自分の研究の中に登場する集団から、自分の研究を批判されたらどうするかという問題について瀬戸徐さんからご意見をいただきうれしく思います。1 日目の総合討論でもおっしゃっていた、「当事者」の広告塔にもならず、また「当事者」に対して暴力的な論述も行わないように常に配慮するという瀬戸さんの姿勢には私も共感いたします。

そして、フィールドと研究者との緊張関係というものは、社会学や文化人類学に限ったものではなく、歴史学にもあてはまるものです。告白しなければならないのは、私はかつて「当事者」の気持ちを傷つけたことがあるということです。ある「当事者」団体から依頼された原稿の中の記述が、彼らの中の一部の人々の歴史認識にそぐわず、編集段階で問題視されたのです。

私の歴史認識は、彼らにとって自分たちの団体の主張の正当性や、被害者としての立場、そして自分たちの記憶とアイデンティティを否定するものとして映ったのです。しかし、私は私の歴史認識が彼らの考えや思いを否定するものではないと確信していると同時に、彼らにはそのように映ってしまう理由も理解できます。何が起きたのかということについて、私と彼らの認識に大きな違いはないと思いますが、それが意味することをどう解釈するのかということについての認識は異なっています。

当事者の心情を理解するということと、彼らの歴史認識や世界観に同調するということとは残念ながら別問題です。さらには、私が何を書いたのかということと、当事者がそれをどう理解するのかということもまた同じではありません。当事者と同じ歴史認識にいたるのが正しい歴史研究であり、当事者から批判を受けた歴史研究が誤った歴史認識であり修正されるべきものだとは私は考えません。そもそも、往々にして当事者間でさえ歴史認識は一様ではありません。

当事者を審判者に祭り上げるべきではありません。そうすることは全知全能の審判者たり得ない当事者にとっても過度の負担となり得ます。むしろ、それゆえに研究者の存在意義があるとも言えます。これは歴史学に限らず、社会学などにもあてはまるはずです。

この原稿については、最終的には、団体内部でも外部の多様な視点を尊重すべきだという意見が出て、私の原稿は修正もなく掲載されました。もし、彼らの歴史認識を強要されたならば、私は原稿を取り下げたかもしれません。歴史認識の相違があるにもかかわらず、私の原稿を掲載してくれたこの団体の対話的態度は敬意に値すると思います。

朴裕河教授の問題で私が気になっているのは、果たして告訴までの過程で、朴教授と原告の間でどれだけのコミュニケーションがあったのかということです。私は論文執筆にあたって協力してくださった当事者の方には、刊行された論文を送るようにしています。場



合によっては、執筆過程で草稿を送ることもあります。そしてその後にその方々から届く電話や手紙を受けとる時には本当に緊張します。当事者に限らず、もし批判があるならば、まずは電話や手紙、あるいは面談という形で対話をする機会を与えてほしいと思います。もちろん、自己発信力のある方であれば、大小様々なメディアを通してご批判をいただきたいと思います。

戦後日本の著名な思想家である吉本隆明は、自宅に尋ねて来た読者を追い返すことはせず、誰とでも議論をしたと言われています。なお、日本では学術書には「読者カード」というハガキがはさまれており、出版社を通じて読者は自分の意見を著者に届けることができます。

朴裕河教授の問題に関係して、もうひとつだけ述べておきたいことがあります。ある時に知り合いのある先生が、自分は朴教授の本を読んで彼女のことを敵だと思った、と言うのを聞きました。私はこれを聞いてどうしようもなく悲しくなりました。「愛知」の者である研究者同士がなぜ敵と味方に別れなければならないのでしょうか。この意味において、福谷さんが紹介してくれた宋代の知識人の交流の在り様は示唆に富むように思います。

坂梨さんの日本の社会全体に市民として生きる余裕が徐々になくなっているのではないかという指摘は、野口さんの指摘とも関連付けられると思います。つまり、人文社会科学者は教師として市民社会の成熟に貢献できるはずだということです。

ただ、我々はエリート意識や特権意識は捨てるべきです。私の知り合いのある歴史学の教授は、「選挙なんかで世の中は変わらない、だから自分は選挙に行かない」と述べておりました。彼は若い頃は学生運動に傾注していた人物です。我々研究者も平等に国民としての権利を付与された一介の市民に過ぎないということは忘れるべきではありません。